

## ‘呪われた血’の叛逆詩人 (16)

George Gordon Byron

楠 本 哲 夫

目 次

### 第十五章（終章） Byronic Image

本稿のテーマは

バイロンが <sup>いのち</sup>生命の<sup>も</sup>炎えつきる<sup>とき</sup>瞬間まで <sup>うた</sup>唄いつづけた  
cosmopolitanism に観る Byronism を究めること—  
である。

1824. 1. 2 ギリシャの護衛艦が Dragomestre に着いた。しかし、悪天候のため、その夜は安全なクリークに入った。詩人は 冷たい水の中に飛び込んで泳いだ。Fletcher も <sup>さすが</sup>流石にギョッとした。それは 着ていた軍服の<sup>シラミ</sup>虱を殺す為であった。

Fletcher は 詩人のその後の 骨の関節の痛みは この突飛な振る舞いの所為だ と述べている。

1. 14 の夜、一行は Missolongi に入港。 詩人は 艦上で眠った。

翌日 15日は――

詩人に残された最後の命の炎が、瞬間、明るく揺らいで、歓喜に燃えた日であった。

詩人は、午前11時、Speziot gun boat から浜に上陸した。真紅の軍服に身を包んだ Byron の勇姿を ギリシャ国民は、救世主として 天使として 歓喜の声で熱狂的に迎えた。

Byron は 用意された宿舎の館に 其の儘案内された。その館の二階の数室が詩人の為に 豪華に 武器の数々の模様で 飾りたてられていた。

一階は、Stanhope 大佐と、Prince Mavrocordoto の為に宛てがわれていた。

Prince Mavrocordato は ギリシャ軍指令官として 卓越した戦略家であり、清廉潔白、高貴な武人として 詩人の眼には映った。

Prince Mavrocordato は 詩人には 初対面であったが、詩人に対し、進軍命令を伝えた。それは、やがて Leopanto の、歴史的要塞を攻撃することになる旅団を指揮せよ という命令であった。

詩人を救世主として熱狂的に迎えた Missolonghi の街は、その礁湖に映える稀な、冬の陽ざしがとてもロマンチックであったが、

しかし、そこには マラリヤ病が蔓延<sup>まんえん</sup>している事が判明した。雨がしとしと降り続く洪水の時期が始まり 詩人は この Missolonghi を ‘this mud basket’ と呼んだ。まさか この様な 文字通り ‘泥沼’ に落ち込み動きがとれなくなるだろうとは、詩人の予期しなかった事態であった。

この長雨の為、作戦活動も、そして 詩人自身の健康保持のための運動も思うに委せず、悪影響をもたらしつつあった。その為詩人は運動不足を余儀なくされて、紅茶とチーズの規定食を 厳しく守らねばならなかった。詩人は運動不足を歎ち 苛立ち、どうにかして馬を走らせたい と渴望した。ボート

で沼を30分漕いで渡れば オリーブの森があった。そこでは 馬を早駈けさせる 猫の額ぐらいの乾いた土地があった。もっとも、100ヤード毎に 丸太のままの木をひたした濠<sup>ほり</sup>の中に 馬を乗入れ駈け抜けねばならなかったが。

しかし今――

自らの健康よりも もっと悩まねばならない事があった。それは 詩人の思惑と違って Mavrocordato への不信感が 兆し始めたことであった。ギリシャ人として、ギリシャ軍を指揮する Mavrocordato に対して 詩人の 片腕である Trelawny は ‘彼はすべての悪に傑出し、欺く術に長けている’ として 痛烈に批難した。

Dr Millingen も、‘彼はどのような奸計を用いてでも我武者羅に前進する人物’ であると評した。

Lady Blessington の予言は的中した。詩人は 4 月には戦闘に突入する事を考えていた。しかし、その為指揮者として 退屈な雑事に耐えくだらぬ議論や手配を甘受しなければならない立場に置かれていた。

詩人は、あまりにも実務的行動的性格、且つ、おきまりの日常の雑務に耐え兼ね、その一切を 未経験の同僚に委任した。しかし その為の失敗が繰り返されるとき見過ごす事ができず激怒した。しかし大義の為に、現状の一進一退に直面し 詩人特有の気の変わり易い激情を結局は、誰にも追従できね程の良識で処理した。

貧民の雑居するこの街での内紛、小競<sup>こざりあ</sup>合い、暴動は、益々 激化していった。

詩人は Speziot の船員と税関吏の列の中に割り込み ギリシャ人海賊の二人に ピストルを突きつけて、トルコ人捕虜を救出してやった。しかし その海

賊二人は その後 詩人の館に侵入して すぐにその捕虜を取り返しに來た。  
そこで 詩人は スリオットの常置見張員を館の一階に 配置しなければなら  
なかった。それは 1月16日の出来事だったが その二日後には 今度はスリオ  
ットが暴動を起こし 一人の市民が殺された。もっと悪い事態が続出する前に  
Byron 軍団がこの Missolonghi から 出て行く事が出来さえしたら、詩人は  
心の中で Derrah! Derrah! 進め、進め、と叫び続けた。

詩人は 今 プロメテウスのように、<sup>どんらん</sup>貪婪な秃鷹から 心の臓を<sup>むしば</sup>蝕まれなが  
ら、報いられない Lukas への愛情を思った。それが 詩人の ギリシャへ  
捧げた大義であった。

しかし——

詩人の Teresa への愛の冷たかったことは、彼女の愛へ報い得なかったことは、  
詩人の この 秘めた大義へ殉ずる決意の反映であった、

詩人は 36才の誕生日を迎え、ten stanza の感動的辞世の詩句を 自らの心  
に呼びかけている。

*Tread those reviving passions down,  
Unworthy manhood! unto thee  
Indifferent should the smile of frown  
Of Beauty be.*

*If thou regret'st thy youth, why live?  
The land of honourable death  
Is here: — up to the Field, and give  
Away thy breath!*

も  
炎え上ろうとする 情炎は  
踏みにじるのだ いまは。  
価値なき 壮年よ！  
汝にとって  
美しき人の  
ほほえみ  
微笑 も  
澁面 も  
どちらでも よいのだ、もう。

若き日を 悔いるなら  
なにゆえに 生き永<sup>なが</sup>らへる？  
栄光の 死の国が  
ほら、そこにあるではないか  
ゆ  
征け 戦場へ  
そして  
献げよ  
汝の<sup>いのち</sup>生命を。

1月25日に 詩人は公式に 最高指令官として指揮をとるよう命ぜられて、  
戦況は the Field 決戦場へ少しは近づけるかのように思えた。

詩人の輩下には 多くの部下を率<sup>びき</sup>いる Capitani, Suliot 部族を率いる Gamba,  
砲兵隊を率いるドイツ大尉が配置された。

しかし、その翌日、いや、その翌日も、 決戦への進軍命令はなく、作戦は、  
戦況は進展を見なかった。

Byron は、このような、愚図つく戦況の中で だんだんとエスカレートする

Missolonghi での内乱、暴動勢力を宥<sup>なだ</sup>める為に心身を磨<sup>す</sup>り減らさねばならなかった。

数日後、またまた、Suliot が不<sup>ふ</sup>様<sup>ぎま</sup>な騒動を起こした。

*The Sword, Banner, and the Field,  
Glory and Greece, around us see!  
The Spartan, borne upon his shield  
Was not more free.*

剣よ 軍旗よ 戦場よ  
栄光よ ギリシャよ  
僕を とりまいて  
いま 見える ！  
楯の上に 生<sup>う</sup>を享けた  
あの、スパルタの民族とても  
これほど 自由では  
なかった ものを。

言い傳えによれば 古代スパルタ人が、Suliot の祖先である。しかし、1824 年には その名誉と武勲を重んじたスパルタ民族の血をひくスリオットは、戦場よりも、楯よりも、パンとバターを重視する部族へと隋<sup>だ</sup>していた。

詩人は、命令に服しなければ、500人の Suliot を 直ちに解雇すると脅した。この通達は 詩人にとって、のるか、そるか、の危険な賭<sup>か</sup>けであったが、殊<sup>か</sup>の他 奏効したようである。

2 月には—— 雨期、洪水が予想された。しかし 暴動の flood の 襲来はなかった。しかし最初の13日間は、その兆しはなくてはなかった。

2月1日、最高指令官 Byron 卿は、Prince Mavrocordato と General Gamba と共に Anatolica を公式に恭敬訪問した。それは、外交政策的動きであった。というのは、この町のどう猛な酋長が1824年、トルコ軍を撃破して尊敬を集めていたからである。

詩人は 痛烈に叫んだ。

“ギリシャに 武器と独立を与えよ。しかる後、学問を与えよ” と。

“ギリシャ人の頭の中では rocket は、西洋のマジックとして映っていた。しかしそのマジックは 彼等自身の崇拜の対象として 既に存在していた。そのようなギリシャ人の知的無能力故に ‘詩人は、今、ギリシャ人に絶望を感じ、裏切られたという無念さを感じた’、と Parry は 述べている。

いま、Leopants への進軍の為、Gamba が スリオット 尖兵部隊を率いた。一方、砲兵部隊を Parry が率い、残りの全軍を Byron が率いて、その後にくることが 21日に取り決められた。

Patras から、二人のスパイが、  
“Lepanto, Arta, Presa の城壁は、いまや、Byron の進軍ラッパの一吹き合図で崩れ落ちるのを待つのみです” と報じた。

2月14日は 一斉に災難が続出した Morea の Colocotrones からの スパイの情報が、Missolonghi に 流布されていた。

“Byron は トルコの Pasha の変装した人物で 彼の腹<sup>はら</sup>は、ギリシャを英国に売りつけようとしているのだ。そして、もし、彼がやらなければ ‘Mavrocordato’ がやるだろう。という流言飛語が流布されていた。

もっと真実の情報は、Colocotrones が再建された臨時政府を攻撃しようとしていたのである。

最後の進軍、突撃を前に、Gamba の率いる300人の Suliot たちは、‘階級の特進’を主張し 軍団の半数が兵卒より士官に昇進して pay を上げて呉れるように と強要した。

藁をも攪む思いで 頼みの綱とした Suliot に対して Byron は この要求に烈火の如く激怒した。

翌2月15日は、もっと悪い事態が起こった。

最初、詩人はこれ以上の 一切の Suliot への処遇は拒否した。

‘トルコ軍へ走って寝返りをうちたいものは、トルコ軍へ走れ！ 悪魔のもとへ走れ！ Suliot よ、自分の低次元を、貪欲を固守するなら、この俺の決意を変えようと望むなら、むしろ、この俺をハツ裂きにした方がましだよ’ と詩人は言った。

かくして この手に負えぬ土民軍は崩壊させ 新しい軍団を補充、再編成せねばならず、その為、進軍命令は延期せざるを得なかった。

名将 Byron と雖、流石に獅子心中の虫は如何ともし難く、その苦悩は底をついた。

そのような苦悩のストレスを気遣って、剛毅、至誠の人 Parry は、詩人の健康保持の為、色々と苦慮した。

詩人は、口の喝き<sup>かわ</sup>を覚え、サイダーを要求した。飲み干して、蹠めき痙攣の発作を起こし、Parry の腕に例れかかった。今、詩人にとってこの様な病状から自分を救う為には、極端な禁欲を保ち、もっと、リラックスすることが最良の策だったのであろう。医師達の最上の策としての治療法は Byron の衰弱した



身体から悪血を流出させる事であった。

しかし——

病状を恢復する為の安静期間は率うじて二日間しか与えられなかった。

2月10日、兵器庫で Suliot の兵士達と、スエーデン技師 Sass との間に激しい口論が起こり、Sass は滅多切りにされ、射殺されるという事件が勃発した。

Missolonghi の街を、虐殺行為から救う為、今、頑迷な suliot を追放する事が必要だった。この街は Suliot による射殺行為が日常茶飯時の如く行なわれていた。

ホトトギスは 生命の限り美しい声で唄う。 詩人の最後の日々、詩人は、自分の命をけずり乍ら 苦悩、煩悩を超えて美の極致をうたい続けた。それは、ひたすらに安心立命の境地を希求する心であった。

愛犬の Lyon は 詩人に献身的忠誠を誓っていた。Lyon は 今 詩人に可愛いがられる事をのみ望んでいた。詩人は運動の為、Lyon と巫山戯て遊んだ。ピストルで次々と射ちとめるビンを次々と Lyon は 詩人の足許に銜えて来た。Lyon の褒美は主人から

‘Lyon よ、お前は ほんとうに忠犬だね。僕の仲間達の誰よりも もっと忠実だね。人間よりも もっと信頼できる。’ と ねぎらいのことばをかけてもらう事だった。すると Lyon はとび上がって主人の手に頬ずりした。

この頃から最後の日まで、詩人は これ迄の病の後遺症に悩まされた。それは、目眩、そして 理由なき不意に起こる恐怖感であった。しかし、ときどきの心満ち足りた瞬間があった。特に、それは去りし日々の女性との思い出であった。

詩人が 30人のトルコ人を本国へ送還してやった事は 詩人の人道主義からだった。 その中に一人の女性と 9才になるその娘 Hatadje がいた。詩人は、祖国英国に残した愛娘 Ada の事を懐い続けていたのである。本国の、Lady Byron から娘 Ada の肖像画が届いた。そして 9日には Ada が病んでいるという報を受け取り とても心配したが 12日にはすっかり良くなったとの知らせを受取り 胸を撫でおろした。

遠乗りに出かけた時——

素朴な農婦から 愛をこめて ‘密’ を贈られた時、詩人の胸に痛む程の喜びが走った。

George Finlay が Morea から Trelawny と Odysseus の書簡を持って到来した。それによると 3月に Salona でサミット会議が行なわれる予定で その時は遂にギリシャの統一、団結が確立される時だ と述べてあった。

Byron が、その為には、最も重要な立場に置かれていた。

ロンドンでは 莫大な ギリシャへの軍資金援助のことが談合されつつあった。そして Byron がその管理運営の為の コミッショナーに任命される事が確定的だった。

その時 Byron は Salona サミット会議から Trelawny を連れ戻す事に決めた。Byron は コミッショナーの責任の完遂の為に Trelawny を必要としたからである。

トルコ軍は、春には西方へと進軍する事を計画中である。との情報が流れていた。

Byron 軍団が、トルコ軍を撃破、敗北させた後には、更に 米国迄も出かけて行き、ギリシャ独立の承認を談合する事をも Byron は考えていた。

3月17日 Trelawny に 最後の手紙を書いた。

‘僕の最も敬愛する Trelawny へ。

春がきた！今日は つばめが 飛ぶのをみた。だから それは 雨期が終わるときだ！’

雨期が終わる時が到来していた。しかし三月は二月よりも もっと悪い事態が起こっていた。そのため、Mavrocordato も他の誰も Salona へ赴く事が出来ない程に道路は河川状態となり 河川は湖礁状態となっていた。

Suliots の Derrah! Derrah! の戦闘の勝ち<sup>どき</sup>関の雄叫びは聞かれず ドルを要求する叫び聲のみがひっきりなしに聞こえた。

詩人は 4月7日, Barff に宛てて書いた。

‘Mavrocordato からの軍資金の督促には、もう、うんざりするよ。3ヶ月で 59,000ドルを渡した。君は 彼の為に10,000ポンド募金できるだろうか?’ と。

4月9日, 詩人は Parry に語った——そして、他の連中には 既に語っていたのだが

‘自分は 全ギリシャに対し 自分がそもそも耐え得る限り、繰返して出資する心算である。自分は ギリシャ独立の大義を貫かねばならぬのだから’ と。

しかし 4月9日, ——それは詩人が実質的に<sup>・</sup><sup>・</sup><sup>・</sup>立ち得た 最後の日であったのだ！

Missolonghi の街には4月, Anatorica による冷酷な、テロ行為が始まっていた。大司教は誘拐され 商店街は閉鎖され襲撃者によって 防御施設は占據されていた。Byron 軍団は 市民の神経を鎮め、復旧させるのに救援し Byron の砲艦による擁護支援の要請にも拘らず、保<sup>ほろい</sup>堡は既に引拂っていた。天気は既に晴れ上がっていた。しかし, Salona に とって これは最も緊急な時で

あり Byron は、馬を駆って数哩、 Missolonghi 郊外へと出かけて行った。その時砲弾を浴び、更に嵐が一荒れする危険性にさらされていたけれども。

4月9日—— Byron は

突然のスコールにあった。発汗し、ずぶぬれになって突堤迄馬を早駈けて、そこからボートで沼をわたり館へ辿り着いた。その夜、四肢がづきづきと痛んだ。そして ひどい悪寒を覚えた。

その翌日、4月10日の土曜日、最後の症状が起こり 病床についた。ひどい頭痛を覚えたが 馬で外へ出た。しかし、それはいつもの thunder headache だろうぐらいに思った。その後で ソファに横たわり、少年の頃の ‘fortune teller の予言’ を思い出していた。

‘37才目の年齢の時に気をつけよ。’ と予告した あの声を思い出していた。

George Finlay が Athene に帰って行く前に別れを告げにやって来た。詩人は 彼とドイツ哲学 そして Manfred, Cain について話し合う事がとても楽しかった。今、詩人は Finlay と Millingen に fortuneteller の ‘お告げ’ を語り Free-thinker として生きる事には、‘bigot’ ‘頑固な迷信家’ として、死んで行く事と同様、正当な多くの理由があるのだ ときっぱりと言いきった。

詩人の症状は、その翌、翌々日、4月11日、12日にわたって、主治医の Dr Bruno が単独で診断した結果、それはリウマチによる発熱で たいしたことではないだろう と考えられた。

詩人は、その処置として、悪血を出すことを頑固に拒否したので Dr Bruno は、‘発汗’ ‘便通’ を促進する為、発汗剤、下剤を与えた。そして熱湯入浴を勧めた。

詩人は いらいらとして落ち着きなく不眠に悩まされ ときどき錯乱状態におち入った。もっとも、肉汁のスープは美味しそうに口にしたいけれども。

しかし Parry は 詩人の病状が悪化するだろう事への色々な徴候に気づいた

ので Zante に赴いてそこの Dr Thomas の診断を受けるよう勤めた。

13日、その為の船が用意され 出航準備が整った時、急に激しいギリシャ特有の東南風が吹き始めた。その為、この挙は一時中止され果たされなかった。これは詩人にとって 不運な 致命的結果をもたらすことになった。

詩人の病状は、今、はかばかしくなく あたかも牢獄に監禁されたような苦悩の日々が続いていた。この日、13日、Dr Millingen も詩人の病状診断の為 駆けつけた。そして、彼の診断も Bruno と同様、今の処置としては 悪血を抜く事が最も望ましく 是非やらねばならぬ事を強く主張した。

もし、かりに、13日、詩人が Zante に行く事が出来ていたとしても Dr Thomas が訪ねて来て診断してくれたとしても、詩人にとって bleeding 以外のよりよい処置は、もはや有り得なかったであろう。Cephalonia の Dr. Kennedy もその処置を同様、強く主張した。詩人にとって今、bleeding しか 詩人の諸々の症状に奏効する panacea 万病特効薬的処置はない というのが、ドクター達皆の一致した意見であった。

14日、15日——

詩人の生命力は退潮しつつあった。詩人は、ラテン語の‘6 歩格の詩’を吟誦しながら、記憶力を維持しようと 頑張り続けた。

そして、澄明なムードで これ迄の一切の自分の書翰を整理した。詩人の鋭利なカミソリの刃の如き思考力<sup>しづか</sup>が蕭に退潮していった時、詩人は‘もう、死神の、呪われた悪魔の眼が自分を注視していること を自覚した。

吸血鬼の医師群達が 引き続き bleeding を嘆願した時、詩人は激しく叫んだ。

‘ヤスよりも ドクターの ランセッ<sup>・</sup>ット<sup>・</sup>の方がより多くの人を殺してきた、’  
また、こう叫んだ。

‘衰弱した患者から 血を吸ひ採る事は 樂器の弦を弛める事だ。それでなくても 衰弱患者の緊張は 既に無くなっている為、その樂器の chord の放つ音色には 欠陥的変調を來たしているのに。’

Bleeding は 不可避的に詩人の生命を断つだろうことを詩人は信じた。献身の医師群が 詩人の目には vampire 吸血鬼として映った。詩人は bleeding のことで 待医達と争い続けねばならず、その為 他の問題でも、彼等の詩人への信用を失墜しなければならなかった。

Dr Millingen は Dr Kennedy に

‘僕の患者は 宗教のことは これっぽっちも口にしなかった’ と報じている。

‘僕は 神の慈悲を乞うべきか?’ 詩人は今、<sup>みづか</sup>自らの心に問うた、その言葉を口にした。長い間ポーズをおいて呟いた。

‘さあ、さあ、弱者の片鱗も、今は、もう口にすまいぞ! <sup>いまわ</sup>臨終の<sup>とき</sup>瞬間も 男らしく振舞うのだ!’

それは 一人の、<sup>まこと</sup>真の Manfred の如く、Arirnanes に挑む、詩人の最後の姿であった。自ら直面した最後のときの心境は Parry に向って、より多くが伝えられた。詩人の要請によって Parry がベットの側に付き添っていた。

詩人は Parry <sup>むか</sup>に対して言った。

‘僕は 自分が一人のユダヤ人であり、回教徒であり、信仰厚いクリスチャンであると思う’。

詩人の最後の<sup>うわごと</sup>讒言は Parry に向って語り続けられた。Cain の幻と共に 錯

乱状態が どっと襲ってきたようだった。謔言が続いた。

‘永遠と宇宙が僕の目の前にある。しかし、この問題に関しては 有難いことに、僕は幸せだ、そして今、心安らかである。

永遠を生きること、魂が蘇えることを 信じ得ることは すばらしい<sup>よろこ</sup>歓びだよ。’ 詩人は Parry に そう語り続けた。

Bruno が 鎮静剤で詩人の興奮状態を治めた。7 日目に 咳込みがどっと襲った。最も、Dr Bruno は 詩人の 病んで犯された肺は このピルで救える程の効能はもうないのだ と主張したけれども。

詩人は その翌日、4 月16日には気分よく悪血を抜いて貰った。そこで Dr Millingen は、うまく肺から頭脳へと問題をうつして

‘Byron 卿、貴方は 悪血を抜かなければ 一命をとりとめても 貴方の頭脳は、理性は奪われてしまいますよ。’ と言った。

Trelawny がこの時 病床に付き添っていたら こう話しただろうことは

‘Byron 卿にとって心に秘めた恐怖感があった。それは—— 詩人は、Scott の Life of Swift をギリシャへ渡る航海中によんだ。そして、ぞっとするような 詩人の兇運の事を私に語ってくれた。

‘僕は ひどい錯乱状態で ニタリ、ニタリと笑い乍ら 重症の狂人として 生命を引き取るだろうよ。’ と、

詩人は 二人のドクターを 従順と嫌悪の錯綜した 複雑な気持ちで じっと見つめていた。そして 言った。

‘さあ、君達ノ いいかね。ユダの屠殺者達よノ 好きなだけ僕の血を採って いいよノ だが、もう、それで最後にするんだよ。’ と。

Dr Millingen は その言葉を聞いて満足して言った。

‘僕は 今、 Byron 卿の 英知ある琴線 chord にふれた’ と。

誠に 意義深い事に Dr Millingen も Byron 卿も どちらも chord という言葉を使った。

Dr Millingen は 自分の最後の Byron 卿への治療的処置が 詩人に結局、解って貰えた事への勝利感、満足感を述べたのである。

そして Byron 卿は 自分の琴の糸が、ボロボロになって、そして その美しい音色が出なくなった事を象徴する言葉として述べたのである。

その金曜日と それに続く日曜日 4月18日の間に 待医達は Byron の血をできるだけ多く採った。そして より多くのピルと下剤と bark キナ皮の錠剤を与えた。そして Byron の膝の上には 二枚の発疱膏が 宛てがわれた。というのは――

‘僕の生きている限り 僕の<sup>ひつと ひざ</sup>跛の膝 は誰にも見させない’ と詩人は口癖の様に言い続けたから。

臨終の床にあっても 詩人のその想いは 念頭より離れなかったであろう。

Pietro が足の<sup>くるぶし</sup>踝を捻坐して病室に入って来た時

‘足許に気をつくれよ’ と抑揚をつけて 吟誦する如く注意した事があった。

1824, 4月, Easter Sunday の午後 詩人の臨終の床の周囲には医師, 近親者たちの苦悶のざわめきと, ためいきが洩れた。二人の doctor のギリシャ語, ドイツ語のささやき, イタリア語, 英語での 近親者たちのためいき。それは, Goethe が, Byron の詩, an Old Testament epic with a powerful canto of



Babelのために 示唆した ‘lovely scene’ であった。Byron は啜り泣く Tita にむかって言った。

‘On questa è una bella scena’ —— 美しい場所をもとめて ——

しかし Millingen には ギリシャについて語った。

‘僕の富も、能力も すべてをギリシャに献げる。うん、ほら、これが 僕のギリシャに<sup>ささ</sup>ける僕のいのちだよ。’

そして Byron は エクサイトした<sup>とき</sup> 関<sup>と</sup>の声を高らかに叫んだ。なかば イタリー語で、なかば英語で。‘進め、進め、僕の後が続け、’ poor Byron!

Byron は いま、‘弾丸’を溶びてではなく みづからの ‘bark’ 咆哮に、酔いしれつつ、<sup>うわごと</sup> 譫言を叫びつつ、<sup>いき</sup> 息をひきとろうとしていた。36才のいのちは、燃えつきようとしていた。しかしながら、——

死の床にあって Byron の<sup>た</sup>垂れた この ‘勇氣の手本’ は 戦場で示す それよりも、もっともっと すばらしいものであり、もっと もっと 全軍の士気を高揚するものであったろう。そして Ledanto の石の城壁の下で Suliot の<sup>か</sup>勝ち<sup>どき</sup> 関<sup>と</sup>の声を叫ぶことがないとしても、すくなくとも Byron の<sup>うわごと</sup> 譫言で叫んだ号令は 一人の勇ましい統卒者を生んだであろうことを物語るであろう。

12匹の<sup>ひる</sup>蛭に悪血を吸はせた Byron の頭からは出血していた、そして、繃帯をきつくしめていたために 激しい痛みを覚えた。Parry が<sup>ほうたい</sup>繃帯を緩めると Byron は 眠りについた。目覚めたとき Byron の思いは、Poor Greece! Poor town! my poor servants! と、いろいろの想いがかけめぐり、ギリシャへの、いつくしみの情、<sup>ところ</sup> 忠僕たちへの献身的奉仕を感謝する訣別の思いをのべていた。生涯を Byron に任えてきた忠僕 Fletcher へ<sup>ききや</sup>私語<sup>こごえ</sup>かれた Byron の臨終のことば——それは あまりにも低声で、とぎれがちだったので Fletcher ですら はっきりと聞きとることができなかったが——

Fletcher の記憶にのこる、最後のことは、それは——

娘 Ada, 姉 Augusta, そして 彼女の子供達, 妻 Lady Byron, 親友 Hobhouse の名前, そして 詩人の心を去来した 軍資金のこと——であった。

Byron は 医師たちから 気にそまない 水菓を飲まされ 立ち上がり よろめきながら隣室へ入って行き Fletcher に助けられて連れ戻された。そのとき 詩人は

‘もう、僕は 眠りたい’ と言った。

それは 午後6時のことだった。

Missolonghi の街中が <sup>まち</sup> 蕭けさにつつまれた。Suliot たちは 街の外で 演習をした。

Easter Sunday の行事も、詩人の、息を引きとった屋敷の近くでは 一切中止された。

英国から 吉報を伝える書翰が届いた。それは——軍資金貸付の決議が可決され、Byron が その、コミッショナーに任命され、Hobhouse が、そのため ギリシャへ出向いてくる旨を <sup>したた</sup> 認めたものであった。

いま、もう一刻の <sup>ひととき</sup> 詩人の意識が引きのばされていたら——。

詩人が この大任を勇躍、歓びに満ち、感激にひたり 受諾し得たであろう日は、もう、今となっては 手遅れだった。

突如として この静寂を破って 激しい雷雨がおこった。街中のギリシャ人は お互いに顔を見合わせた。彼等は その悲しい兆 の意味を 解し得たのである。

“巨星 逝く。” 彼等の 読みは 正しかった。

1824. 4. 19 復活祭の月曜日、午後6時、Byron は、昏睡状態を続けていたが、ほんの瞬間だけ 目を開け、そして すぐに 閉じた。それは、その

瞬間、戦局を、そして、この世の總べてを、充分に、その目で 確かめ、心に満ち足りたような仕草であった。英雄詩人 Byron にふさわしい最後であった。

“巨星 <sup>お</sup>墜つゝ” ギリシャ全土は理解した。名将 Byron が、ギリシャの栄光のために起ち、その刃が <sup>やいば</sup>ぼろぼろにこぼれ尽きる瞬間まで 闘い抜いたことをゝ

ギリシャのあらゆる街で memorial service が蕭かに、しめやかに取り行なわれた。そして Missolonghi では Mavrocordato によって 街を挙げて 喪に服するよう宣言が布告された。

4. 20の未明、Byron 卿の37才目の生涯を記念して 37発の号砲が轟きわたった。

あらゆる事務所も、あらゆる商店も、閉鎖し Easter の行事も、一切、中止された。そして 三週間、全土が喪服を身に着けた。

救世主、Byron 卿の喪に服し 哀悼、惜別の情に耐えかねてか 天地も <sup>くらぐら</sup>暗々と 雷雨が降り続け 葬儀も22日迄、その執行を延期しなければならなかった。この日、Byron の bodyguard たちによって <sup>ひつぎ</sup>棺は 聖ニコラス教会へと運ばれた。大司教の子息、Spiridion Tricoupi が oration を告げた。

しかし人々は もっと もっと Byron の功業偉徳について 聴き入りたがった。かくて 詩人の肺を納めた骨つぼは、その後、St Spiridion 教会の中に安置された。

Trelawny は、4. 25頃 Misolonghi に急遽 駆けつけた。この 生涯の最も良き友 Byron の死体を その棺を閉じる前に一目だけでも、拝みたい、そして、Byron の死体に向って 最後の言葉を、‘Apollo’ with ‘the legs of a sylvan satyr’——酒と女を愛した、サテロスの銀の脚をもつアポロ——と よびかけたいと 願った。しかし、到着が遅れたために それは 果たせなかつ

たようである。

Edward Blaquiere も遅れて駆けつけた。Florida 号に乗船して 英国からはるばる、バイロンの待ち焦がれた 第一回の軍資金を届けるためであった。しかし 皮肉にも ‘この、Elorida 号は、5. 25. Byron の死体を乗せ、故国、英国に ひきかえすことになったのである。

Byron 卿は 何処で 永眠するの<sup>たましい</sup>か、その魂の憩うべき場所を 何処に求めたかったのか、そのことは、生前既に忠僕 Fletcher に、Parry、其の他の者たちに ‘自分の死体は英国に埋めて欲しい’ と言った。

もっとも、Millingen には、からかい半分で ‘僕の死体は、ずたずたに切り刻んで、英国に送ることをしないで欲しいよ。 しめやかに ひっそりと このギリシャの地の一角に埋めて欲しいよ’ と言ったことはあるが……しかしそれは はっきりと 本心ではなかった。

これより以前、また、Trelawny には、詩人の意中をのべて ‘僕は自分の骨が Westminster, Poets' Corner に永眠<sup>ねむ</sup>る 英国の雑詩人<sup>む</sup>群と ごちゃまぜにされ 雑居するのは 嫌だよ。’ と言った。

Lady Blessington には、しかし、語った事がある。

‘僕は 緑濃きギリシャの土の中に永眠りたいけれども……、 僕が 望むならば、栄光の Westminster Abbey の大理石の墓地に永眠することを 拒絶されることは まさかないでしょうね。’ と語った事もあった。

しかし——

Westminster, Poets Corner への詩人の殿堂入りは 拒否された。Westminster の司祭長は、Satanic School 悪魔派<sup>ひき</sup>を率いて、悪名高かった詩人の遺骸を殿堂入りさせることを拒否し、一方、St Paul 寺院の司祭長は 詩人のために Hacknall の墓地が 詩人にはより良い、よりふさわしい埋葬の地であると考えたようである。

Missolonghi から Byron の<sup>ふほう</sup>訃報が英国の津々浦々につたえられたのは 5 月中旬だった。それは 地震の震動のように全土に電撃的ショックを与えた。  
‘Byron is dead’ ‘バイロン卿 死す’。誰もみな<sup>せき</sup>寂として声なく、ただ、その<sup>ふほう</sup>訃報に接し、<sup>いひ</sup>息をのんだ。しばらくして——

Mary Shelley (シェレー未亡人) は、悲痛にみちた烈しい口調で 詩人を追想して ‘Albe’ ——<sup>なつ</sup>懐かしい、気まぐれな、魅力に溢れた Albe’ よ、’ と絶句した。

Lady Byron—Annabella—は、ハラハラと落涙し、感極まって、その涙を拭おうともしなかった。

生涯の親友 Hobhouse は 詩人の ‘笑ひ’ ‘魅力的魔力’ ‘詩人を献身的に溺愛した多くの友’ を 回想し 詩人との交友の一駒一駒が走馬燈のように 思い出の中を走った。

詩人の生前刻明に書き綴った回顧録は、Byron 家の家族の代表立合いのもとに焼き棄てられた。Moore は この事に抗議したけれども、後世に汚名を残さないためにと配慮した Hobhouse の強い主張があったからである。それは、1824. 5. 17 —— 詩人の妻 —— Lady Byron の誕生日であったが —— John Murray の家の客間で決行された。

Hobhouse が 7. 2. Florida 号の船上で 香料をつめた Byron の遺体と 詩人の肺と脳を納めた骨<sup>ほね</sup>つ<sup>つ</sup>ぽ<sup>ぽ</sup>を 受け取って この棺が公式に、Westminster の Great George Street に、この寺院の陰に 安置されるよう手配した。これは 詩人が一世紀半後に1969年 Poets’ Corner に殿堂入りしたときまで 最も近距離の場所だったが、その日、その tablet は veil をぬいで 詩人の亡霊は 皮肉な この殿堂入りに苦笑しうち興じたことであろう。すくなくとも この儀式を司祭した fellow-poet, William Plomer は そう述べた。

Whig 党 Radical 党の貴族、紳士達の多くが、7. 12の公式の葬儀には 参列

し 45台の馬車で Pancras Gate まで葬儀の列の後につけ、そこから、Byron 家の縁者と詩人の親交あつかった友人達が、2 台の馬車で墓地まで霊柩車の後にしたがつた。

ロンドンでは 多くの参列者の群衆が蕭かに弔意を示した。Mary Shelley は 棺が Highgate Hill をしづしづと上って行くのを見守っていた。Caroline Lamb は その棺の主が詩人であることを知らなかったが、霊柩車が Brompton Hall のそばを通り過ぎた時、これを見送っていた。Caroline は、その夜、夫 Lamb から、それが Byron の棺をのせた霊柩車であったことを知らされ、悲しみのあまり、錯乱状態におちいり、泥酔して自室にこもり、キリストの十字架像と並べてかけてある Byron の肖像画の下で泣きくづれた という。

霊柩車は Nottingham の Blackmoor's Head で、小休止の後、詩人の遺体は Newstead の近くの Hucknall Torckard の Byron 家の納骨所に、15体の Byron 家の遺骨と共に納骨された。ときに 1824. 7. 12であった。

そしてそのときをもって

‘the tomb closed for ever on Byron’ と Parry は述べている。

しかし、Parry のことばはまちがってた。1938、この墓は あばかれ ごく少数の人によって Byron の遺体は 眺められた。

その人々の一人、教区委員、Arnold Houldsworth の証言によれば “Byron の跛の右足は切断され 棺の下方に安置されていた。とその驚きを伝えている。

詩人は、だから 呪はれた あの

‘The cloven foot’ とは 遂に 袂別していたのである。

Byron は 投影の詩人、行動の詩人であった。

- (1) その生涯と その詩は 切り離すことができない
- (2) 詩人がわれわれにのこした強い印象は、詩人が、being ‘one of us’ 当代の人々の一人として 彼らと共に生きた。

という二点で ユニークな詩人であった。

詩人は、その生涯を ひとりの人間として、そしてまた ひとりの詩人として、ひとしく、格別の好奇心を煽り高揚し続けた。自らに対しても、同時代の人々に対しても。

今日、我々は Byron のドラマチックな、波乱万丈の生涯を考えることなしに Byron 詩を正しく評価することは できないであろう。

Palazzo Mocenigo での所行の数々を考えることなしに Don Juan を読むことはできないであろう。

Byron Brigade バイロン軍団を考えることなしに ‘the Isles of Greece’ をよむことはできないであろう。

生涯の友、Hobhouse は、在りし日の詩人を偲んで

‘詩人は 場ちがい<sup>まちがひ</sup>に 気むづかし<sup>きむづかし</sup>くはなかったし はしゃぎたてることもなかった。

自分が そこにいる仲間たちとの交友にいつの場合も溶けこみ 積極的にこれを利用したようである。’ と述べている。

Goethe が

‘Byron is not antique and not romantic, but he is like the present day itself’ と詩人がその時代 そのものを生きたことを強調して Byron の人格を評したのは至言である。

Parry と Lady Blessington は人生の裏面に通じていたが、詩人の社交的態度について それぞれ 新鮮な ユニークな評言を述べている。つまり

詩人は、The popular ‘march of intellect’ そして その当時、地方の旧家にのみ存在したような より広い社交的優雅を醸し出すことができる その Power の存在を、価値を信じた。

詩人は、Parryにむかって 彼の考えた新しい‘機械工達の学ぶ学校’を賞め讃えた。もし、その学校が 労働階級である彼等自身たちの手で運営されるならば その結果として 知性の解放が一つの黄金時代をむかえるであろう。そして、自分も それに50パウンドの援助金はよろこんで寄附させてもらうよ。と語った。

‘貧しいことは惨めである。しかし、たとえ貧しくとも 情なき、意味のない、上流階級の、気晴しの浪費的道楽よりは ずっと ましだ。とも語った。そして 詩人は みづからが、その放蕩貴族の心境から、遂に解放されたことを、よろこび、安堵し、神に感謝していた。

Parryは、Byronの抱いた下層階級の人々への、新鮮な明確な、興味関心に驚嘆した。Byronは、下層階級の人々のジョーク、逸話に格別興味を抱いた。そして Parryといっしょに 機械工たちの働く工場を訪ねて 彼等の働きぶりを その目で確かめ 学びとった。

このような、詩人の非凡な観方は、奇しくも、神秘主義と宇宙時代とミックスされた、20世紀現代科学への好奇心に通ずるものであった。

詩人は Medwin と月旅行のことを論じたのみならず ‘The Island’ の中で A space-age 宇宙時代の到来を予言した。

Herschelの望遠鏡を覗いてみて、多くの遊星群に その星人の住む多くの世界があることを予知して Parryに語った。

‘神に任える聖職者は、みな 天文学に関する完全な知識をもつべきだ。天文学ほど人の心を、より寛く、より大きく、より豊かに啓発して呉れる科学はないよ。天文学は、人間の狭い心を その狭量、偏見を解放して呉れるだろうからね。’



cosmopolitanとして 終始した 詩人の豊かな雅量, ‘大器 Byron’の知性, 人間性を<sup>ほうふつ</sup>髣髴させることばとして, 19世紀初頭に於けるその啓眼に, その素晴らしい頭脳に, 只, 敬服するのみである。

詩人は Dr Kennedy と 神について, 多くを語ったが, 神を観ることに 天地創造の一元の神を 直視することができた。知性人として才幹として 19世紀初頭を代表する典型的人物であった。

しかしながら——

この豊かな知性をこえて, 望遠鏡ですら 救い得ない矛盾を<sup>はら</sup>孕んだ 詩人であった。一言にして, それは 詩人の ‘分裂した性格’ であった。Byron は ‘矛盾の詩人’ である。

Lady Blessington が “何故, 詩人達の多くが 結婚生活において 良き夫となれないのか” と 尋ねたとき Byron は即座に答えた。

‘結婚とは, 他の惑星人——この地球人の 多くの道徳律に服従する義務のない——が, 地球人と<sup>・</sup><sup>・</sup><sup>・</sup><sup>・</sup>紛らわしい同盟を結ぶようなものです。だから, その惑星人は, この地上の多くの苦しみを免除されて, より明かるい天球へと その想いを馳せ そのパートナーである地球人がひとり苦しむのを放置し 置き去りにしなければならないのです。’

Annabella との <sup>つか</sup>束の間の結婚生活を想起しつつ, 吐き棄てるように その意中を述べた この詩人のことばには, 当時の英国社会の 古き紋切り型の道徳律への叛逆と 新しいモラルの樹立への抱負が 偲ばれる。

そして, ここに, ‘Heaven and Earth’ 未完の ‘Mystery’ の作品の背景的テーマがあった。

詩人が, 何故 旧約聖書の ‘seraph’ の 神話にとりつかれたのか その意中

を窺い知ることができるであろう。

‘mortals’ と結婚し、美しい ‘giants’ とこの地上に暮し、或いは大災厄を逃れるために花嫁を連れ去って行く angels の話——

それは、詩人群を意味したのだ。

しかし、彼等の 宇宙への 未知の惑星への 天界の島への 逃避。それは 現実性をもつものだろうか？。

Byron の ‘Mistery’ の ‘third act は未完のままとして、詩人の mystery は永遠に未解決となった。

Shelley は ‘Adonais’ の中で 詩人を ‘The pilgrim of eternity’ ‘永遠の巡礼者’ とよんだ。その姿は 詩人が <sup>しい</sup> 虐たげられた民族の解放者であったこと、言語を陳腐な考えから解放したこと、そして、詩人群を象牙の塔から解放したこと の 功績、偉業に見出すことができるであろう。

詩人は かつて Annabella に向かって語った。

‘冥想、沈思黙考のみにとどまる すべての存在は 間違っている。悪である。人は何かを行うべきである。ある意義深きことのため行動すべきである。’と。

Goethe は 詩人の ‘文体’ を 行動の一形態としてとらえて言った。‘たとえば、それは 鋼鉄板を切り裂く wire である’ と。

詩人がもし全面的に 自らを解放し得なかったとしても それは 彼がなお 時と空間の中を一巡礼者として彷徨し続けたからなのである。しかし 詩人程 ‘時’ と ‘永遠’ の間に介在する ‘相違’ をより鋭く述べ得たものはいないであろう。

詩人の最も好きな時刻は 深夜と暁方の間の一刻であった。ペンを置いて窓外の寂かな海を眺めるとき どっと襲いくる ‘the sence of contrast’ の感覚こそ、詩人のいちばん親しんだ感覚であった。だから 詩人は 追放の時期を ‘海の見えない家’ に住んだことはなかった。

Tom Moore に宛てた手紙の最後の文句は、 ‘しかし、嗚呼、 Poor human nature! おやすみ! いや、もう、朝だ! いま、4時だ! the Grand Canal の上に 曙光が輝いている。そして the Rialto より陰影はひいてゆく。

Byron ほど より多くのものから その暗い陰影を取り除いた詩人はないであろう。

悠久の星の光輝に対坐して 詩人は想う。

What Nothing we are!

Mazzini は 詩人を評して言った。

‘Byron は 自分の堅琴を自らの手で壊して、ギリシャへ赴くことで その巡礼の旅に終止符をうった。しかし、その旅は the ‘nothing’ of ‘poor human nature’ を超えてそれを ‘永遠の意義’ へと高揚した。

Byron の投げた波紋は、全ヨーロッパに、そして 世界の津々浦々にまで波及していった。それは――

哲学者としてではなく、論理的思想家としてではなく、詩人自らも 無意識のうちに、一つの真理を一告げたのではなく―― suggest したのである。

人々に対して ‘新しい考え方’ をもつべきある事を 訓えた。人々に向かって ‘それが、この世で 文句なしに 絶対的考え方 であるのか どうかを 自問自答すべきであることを訓えた。

‘Evil and Wicked’ として よび慣らされてきたものも、それ特有の ‘悪魔的

美’をもつもののだとして、示唆したことがヨーロッパ全土の文学界に新風を吹き送った。Satanic spirit!

悪魔的精神ノ その真の意味は——

‘清純なモラル’とは異った‘別の道德律’の存在を示唆したことである。

それは——

‘苦悩<sup>おきて</sup>することの律’ ‘闘争<sup>おきて</sup>することの律’であり 例え、不義、冷酷の側にくみしても、しかも、‘strength’力の光輝を放っているノ

Byron は、自らに叛逆して、しかも、所信を貫き、敢行し それを うたい続けたノ

Byron 文学が 不滅の光を放つのは Byron の 力が 文学を支配し 制し得たからである。

Byron が 自ら‘絶望的なるもの’ ‘邪悪なるもの’を力強く讃えたが故にこそ、Byron 自身すら、見究めることができなかったものを、人々は 垣間<sup>かいま</sup>見ることができたのである。

‘世間から はみ出した 落ちこぼれた 悪役<sup>ワル</sup>’こそ 人の世の掟<sup>おきて</sup>——人間がそれから完全には脱出できない——の 指標 であることを Byron は 示唆した。

Satanic School! ‘悪魔派<sup>あくま</sup>ノ

それは 桂冠詩人 Southey が Byron に向ってたたきつけ、吐き棄てた ことば であった。

しかし、今—— Byron は

Westminster, Poets Corner に 雑詩人群と同居して蕭かに永眠る。／ それは死後一世紀半余を経て皮肉な、奇しき、栄光の、殿堂入りだった。しかし——Lake Poets の誰もが胸にし得なかった最高位の榮譽勲章 ‘悪魔派’ が その胸に 燦然と輝いている。

スコットランドの生んだ 19世紀最大の鬼才、George Gordon, 6th Lord Byron の偉徳を、人々は 忘れ得ない。／ いつの世も 仰ぎ見て 憧がれ、慰む <sup>あたた</sup> 滋かい光芒を放っている。／

（1986. 6. 30完）

（後 記）

‘呪われた血’の叛逆詩人 Byron’ シリーズは 56年 3月23日、第 1 号を起稿。以来、61年 6月30日、第16号をもって 脱稿。

5 年と 3 月余の牛歩を顧りみるとき、とてもエクサイトした自分が微笑ましくなる。

名門貴族の誇りは捨て難く、しかも、悪魔の呪われた血を受け継いだ Byron は、保守的貴族社会に、そして、<sup>みづか</sup> 自らに対して 叛逆せざるを得なかった。そして、見事に新しいモラルを確立することによって 善と悪を 止揚した。Byron は 20世紀の今もなお、<sup>くらやみ</sup> 闇暗に強烈な光を放つ一つ星である。 警鐘を乱打した偉業は 永遠の光輝を放って、現代人の心に生きている。／ ことを信じつつ、筆をおく。

参 考 文 献

- 1) Elizabeth Longford: Byron, Hutchison.
- 2) Ernest Hartley Coleridge: The Poetical Works of Lord Byron: Lewis  
Prints.
- 3) Leslie, A. Marchand: Byron's Poetry, John Murray.
- 4) Francis, M. Doherty: Byron.
- 5) John, D. Jump: Byron, Rontledye and Keygan Paul.